
創造された世界のひと時

集

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

創造された世界のひと時

【Nコード】

N7106S

【作者名】

隼

【あらすじ】

不思議な鳥から受け取った招待状、時間がたつと変わる文字、ナミツチといわれる管理人。

不思議な夢のキャラクターたち。

そんな世界に迷い込んだ僕・・・隼はやなは、いろんなキャラに出会い、時間を忘れていた。

この世界の人間になれるなら・・・
どんなに楽しいだろうか・・・。

時の流れ（前書き）

まあ、いろいろと注意してください。

「うわぁ・・・あの大きい木はもしかして黄金樹おうごんじゅ？あつ・・・あつ
ちは何かなぁ・・・あれは誰かなぁ・・・」

僕はハイテンションだった。

自分の作ったキャラが生きている・・・話せる世界に来たから。

「そんなにきよきよして・・・どうした？」

小さく・・・且つはつきりとした声が後ろから聞こえた。

「えっ・・・？」

「変だし、怪しい・・・ディアより怪しい。」

彼は黒い髪くろいかみの所々に赤い色の髪あかいいろのかみの毛があり、クラの様に長髪ながかみ・・・。

僕は彼を知らない・・・。

「君・・・誰？」

「レジェント・・・。伝説という名前がつけられた人造人間。」

「人造人間っ・・・？」

「そう。」

レジェントは冷静で表情ひとつ変えない。

「ディアとパルとクラの血液から造られた。」

「パルって・・・？」

そうたずねた瞬間・・・僕の隣の空間が開き・・・赤い髪の毛の人物が出てきた。

「誰か！僕を呼んだ？」

「・・・隼が、パルって誰って言った。」

「えっ・・・あく勘違いしちゃったんだくテへっ」

僕はわけがわからない・・・目の前にいる人物がパル・・・？

「あ・・・あのう・・・パルさん？」

「あつ、パルって呼び捨てでお願いします（>。<）b」

「あ・・・うんパル・・・。」

「なぁに^^隼」

僕はちらりとある方角をみる。

青い髪の毛の人物とクラ・・・青髪はずっと見ている。

「さつきから見てる人が・・・。青髪で・・・クラの近くに・・・。」

レジェントが見ないで答えた。

「どうせディアだろう。」

パルも答えた。

「あ・・・青髪でクラの近くにいたひとなんて、ディア以外ないとおもう^^;」

「ふっふっふ・・・ばれてないばれてない・・・。」

ディアはつぶやいている・・・。

俺はもうばれたと思うのだが・・・。

だって・・・怪しい・・・。

「ディア、無駄なことはやめようぜ・・・?」

「なっ・・・無駄って!?!」

「もうばれてるって。」

「え・・・。」

隼がこちらに来てから・・・約五時間三十分と二十三秒・・・。

彼の家がいいのだろうか・・・。

こちらの時は速い・・・。

人間界では1時間だが、こちらでは1分ほど・・・。

すでに五時間たっている・・・。

五時間≡300

トータルで、300+30≡330分。

人間界では330時間経過していることになる・・・。

330時間≡約14日・・・。

親、警察、親戚、友達がどれだけ捜しているだろうか・・・。

ナミツチは教える気はないのか・・・。
俺はため息をついた・・・。
そして、隼のいる方へ歩いていった。

「なあ隼・・・。」

突然クラがやってきた。

「ん・・・？なに？」

「お前、帰ったほうがいい。」

「え・・・？？」

クラは・・・そのあと、とんでもないことを言った

「こちらの一時間はお前の世界での60時間と等しい・・・お前が
こちらに来てから5時間31分15秒・・・14日はたっている・・・

・・・。」

と・・・。。。

時の流れ（後書き）

たぶん続く、てかうん・・・続く^^
下手だなあ・・・表現とか。

隼の思い(前書き)

僕がここにこれた理由・・・？
簡単なことだ。

僕は・・・

ある人に作られたキャラクターでしかないんだ。

だからこれた・・・。

それだけ・・・。

隼の思い

「えええええっ！！！！クラっ・・・本当にもう14日!?!?!?」
あまりのことに驚きが隠せなかった。

「そっだよ、さっきも言った。」

クラは冷静だった。

「ねえっ・・・どうしようっ・・・」

僕だけがあわてていた。

クラは、「落ち着け」とつぶやき、ある人物の名前を口にした。

「ナミツチに聞けばいい、何考えてるのかわかるだろう・・・。」

僕は思い出した・・・。

ディアに任せるといつていたナミツチを・・・。

「・・・クラ?ディアっている?」

クラはある方角を見る、青髪の人はこちらを見ている。

「あいつがディアだけど?」

「あっ・・・やっぱりそうなんだ・・・。」

パルたちの言っていたことは本当だったんだなあ・・・。

不意にレジエントがつぶやく、

「ディアか・・・なるほど、ナミツチはきっとディアに時をもどし

てもらおうと考えているのだろう・・・。」

クラは手をたたいた。

「なるほど! ってことはディアも人間界に連れて行くのか?」

「そうなるだろうな」

レジエントは冷静にこたえたが・・・ふっと何かを思いついて顔を

しかめた。

「しかし、こちらの時が動かなくなるな・・・。」

時が動かなくなる・・・ってどうということだろうか・・・。

動けないのかな・・・。

いきなりパルが何かを思いついたかのように叫んだ。

「そうだ！！時の世界からディアの代わりをつれてこようー！！」
ちんきたいたい人の中から！！」
クラとレジエントは同時に言った。
「流石パル、名案だ」
二人は笑顔だった。

「あのさあ・・・クラあ・・・そろそろシカトやめて？」

「ん？ああ、ディアいたの??」

「酷い！！」

ディアは音もなく忍び寄っていたらしい・・・いや、何度も呼びかけていたらしいが・・・。

俺には聞こえなかった。

ディアはぶすつと頬を膨らませていった。

「僕が新しい友達を紹介しようとしたのにさあ・・・」

今かよ・・・と俺は思った。

「・・・いまはちよつと・・・」

今は忙しいの・・・という思いを乗せてつぶやく。

「えゝそんなあ」

ディアは少しため息をついていった。

「時の世界にいたときの大親友・・・ホウドがきてくれたのに・・・」

なんとというgoodなタイミング・・・。

俺はにやりとわらいディアに言った

「そうか、ちようどいい、つれてきてくれ。」

僕は・・・帰らなくつちやいけないのか・・・。
もっとこっちにいたいと思ってしまうなあ・・・。

なぜって・・・簡単だよ、

こっちは楽しい・・・

あっちは苦しいだけだ。

馬鹿げた苛めがあつて・・・犯罪があつて・・・戦争があつて・・・
貧富の差がある。

誰もわかつちやいないんだ・・・。

同じ人間であることを、

誰もわかつてないんだ。

犯罪、苛め、戦争・・・これらが意味のないことだって・・・。
貧しくなりたくてなつたんじやないのに・・・。

それに比べてここは、

この村は・・・

この村にいる人物全てが友達で、助け合い、やさしくて・・・。
仲間はずれにされた・・・ってことをこういう風に考える人たちの
集団・・・。

「仲間はずれ・・・？それってこの世に一人で、特別だってこと？」
どんなことにも負けず、どんな困難も仲間と一緒に・・・
仲間のために・・・

この村はいいところだと僕は思った。

カエリタクナイ・・・。

ナラバ・・・

カエラナクテモイイヨウニスレバイイ・・・。

そんな力・・・僕にはないのに。

ああ・・・僕は・・・僕の世界を捨てたい。
いらぬい・・・。

隼の思い（後書き）

あははははははは……。。。

嗚呼……へたくそWWW

隼の役目（前書き）

僕ができること…

僕ができる何か…

それは…

“現実”に居る僕がしていること…

小説を書き、みんなに夢を持ってもらう

それが…僕の生まれた理由

僕の役目…

隼の役目

帰りたくない…

子供なら誰でも思うこと…

楽しいことはやめたくない…

何で苦しみがある…？

僕に…チカラガアレバ…

「お〜い、クラ〜。連れてきたよ〜！」

ばかでかい声で叫ぶディア…クラは地獄耳だった…それはみんな知
っていることだ。

「〜！声でかいよディアっ！」

「いつもの事じゃん」

それより、とディアは言い、連れてきた人物を隣に立たせた。

「クラっ、この人がホウド イケメンだろっ？」

ホウドは戸惑いながら言った

「そりゃないなディア…俺よりクラさんの方がどうみてもイケメン

…」

「クラって呼んでくれ、それから俺はイケメンじゃあない。」

…これで、なんとかなるなあ…と、少し安心…

「突然だかホウド…頼みがある。」

「本当に突然だなあ…」

ホウドは苦笑した…でも、言うしかない…。

それで…？と、ホウドは続けた

「頼みって？」

「ああ、実は……」

「なるほど……なるほど……つまり、隼って人を帰すために、時が必要と……」

「そういうこと、」

ホウドは微笑み、ウインクして見せた。

「Okクラ、ディアの親友に悪いやつなんかいないからな……」

「そうか、ありがとう。」

これで、隼が帰れる……

ふっと視線を感じたので振り返ると……

そこには隼がいた。

「隼、やっと帰れるぞ。っ言つか、帰らなくちゃいけないんだがな

……」

隼は少しうつむき、悲しそうにたずねた

「やっぱり……ここに居ちゃいけないの？」

クラはさびしそうにしている隼を、慰めるようにつぶやいた。

「そうだ、帰らないといけない……」

「そう、帰らないとね」

いつから居たのかは知らないが、クラの隣にナミッチが立っていた。ナミッチはにつこりと微笑みそして続けた。

「この夢を見た……ってことはこの夢を語ることができる……。語って、この夢の世界を広げる……それが隼の役目、だから……かえってほしい……現実……」

隼は顔をあげてクラとナミッチをみてたずねた。

「また……ここにこれる？」

「ああ、これるさ」

クラは微笑み、告げた

「寿命で死ぬときに、自分が願っていたことが叶う……だから、お前が大人になり、おじいさんになっても、この夢を信じていられるならここにこれる。」

「本当に？」

隼は目を輝かせてクラをみた

「ああ、本当だ。」

クラは笑顔だった…。

「じゃあ、お帰りの時間です。」

ナミツチがかしこまったように言った。

すると…あのとき、あの招待状をもらい、サンポマエに出たときに現れた扉が召喚された…

ナミツチの魔法で扉が開く

そしてその扉の向こうには…隼の部屋が広がっていた

隼はその扉にはしり…

向こうの世界げんじつとこの世界の境界線まで行って足をとめた

隼は最後に振り返り、クラやナミツチ…ディア、レジエント…パル

…その人たちを…夢の住民をもう一度みて…叫んだ

「忘れない！！僕が広めてみせる！！クラたちにまた会うその日まで！！」

それを告げ終わると彼は…境界線を越えていった。

「では、時をさかのぼり…ナミツチの招待状をもらった後の部屋に…。」

最後にホウドが唱えた呪文…

これで…元通り…

50年後…

65歳になった隼は、夢をまだ見ていた。

小説を書き、絵を描き、自分の夢を捨てなかった。

孫はそんなおじいちゃんが好きだった。

とつても楽しい話をしてくれるからだ。

「ねえ…おじいちゃん！お話して〜」

「いいとも、ピー村という世界のお話じゃ。」

〃

とある宇宙に、とある星が生まれた。

此処は地球と呼ばれるほしとは違い、二次元に存在し、誰も心に生まれる星…

そしてコノ星には人の「夢」もしくは「妄想」「理想」が住み着いた。

人々はコノ星のことをわすれ、現実…つまり地球を見るようになってから成人する。

「夢見ていいのは子供だけ。」そんなことをつぶやいた大人たちがいた。

夢は誰もが平等に見れるもの…

それを「みていたら子供」のようにあつかい…

“夢”は薄れていった。

ある日、その夢はまた動き出した。

その夢は…

「^{あなた}君の心の中にある…」

隼の役目（後書き）

これでひと時は終了!!
短い!!まっ・・・仕方ない^^;

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7106s/>

創造された世界のひと時

2011年5月24日17時31分発行